

創造的慣習性, あるいは慣習的創造性

— 誤表記にみる慣習とせめぎ合う文法の姿 —

吉川 正人 (慶應義塾大学)

1. はじめに

とある講演 (von Petzinger, 2015) の書き起こしに, 以下のような 1 文が登場する:

(1) The funny this is that at most sites the geometric signs far outnumber the animal and human images.

冒頭の “The funny this is …” というフレーズは文法的には明らかに破格であり, 音声を聞くと, “The funny [thing] is …” と発しているように聞こえるため, 「this は thing の誤表記である」と結論付けることができそうである. しかしながら, ここには 2 つの問題がある:

- (2) a. なぜ書き起こした人物は this と表記したのか
- b. 破格な表記が他の「正当」と考えられる表記 (... thing ...) になぜ優先されたのか

音声的には thing と発しているように聞こえ, 母語話者であれば誤表記するとは考えにくい上に, 仮に音声的には this に聞こえたのだとしても, 書き起こし作業にあたっては, フレーズ全体の文法性や表現の慣習性に影響され, トップダウンに thing を用いた表現が採用されると考えるのが自然である. さらに, 当該フレーズ the funny this is や, funny を他の形容に置換した類例 the interesting this is 等をウェブ検索してみると, 相当数のヒットがあり, 一回限りのミスではない, ある種のパターンとして認定できる可能性が示唆される.

本発表では, この [the ADJ this is] 表記についての考察を通して, 慣習性とせめぎ合う文法の姿を素描することを試みる. 具体的には, 以下の点を論じる:

- (3) a. 当該表記は [the ADJ thing is] の thing 部分が音韻的な縮約により音変化したことで生じた表記である
- b. thing が this と表記されるのは, 音韻縮約によって「thing ではない」と判断され, 同時に, 類似の音を持ち一定以上の頻度で生起する慣習化されたフレーズである this is … が想起されたためである
- c. a, b が正しいとすれば, 音声の認識 (とそれに基づく表記) はより大きな単位のフレーズが優先され (Cf. イディオム原則: Sinclair, 1991), 合致するフレーズが存在しないとみなされた場合は, 部分を構成するより小さい単位での照合が行われる, ということを示唆する
- d. c の帰結として, ヒトは単語を合成して表現を生成しているというよりは, 適切な表現全体を選択し, 必要に応じて最小限の分析を行い部分をつなぎ合わせることで表現生成を行っている (Cf. 「必要な時だけ」解析: Wray, 2007) ということが示唆される

2. [the ADJ this is] の実態

2.1 ウェブ上の実例

1 つの可能性として, [the ADJ this is] という表記が生じたのは, (1) の書き起こしを行った人物による単なるミスであるということも考えられる¹⁾. しかしながら, 上に述べた様に, ウェブ上には当該表記の実例が数多く存在しており, また, ADJ 部分の実現値は funny だけでなく, 例えば interesting などに置換した the interesting this is といった表記も散見される. (4) に実例を提示する.

- (4) a. **Mal’s got a very princess-y look in the beginning. What inspired her look?**
Kara Saun: The funny this is, I call Dove my little princess. ²⁾
- b. “The interesting this is that Gov. Romney has been running around talking about his five-point plan,” he said. ³⁾
(下線は筆者による. ボールドはオリジナル.)

¹⁾ ただし, それでも, 「なぜほかならぬ this が表記として選ばれたのか」という (2) に挙げた問題は残り, 「偶然」として処理するほかない

²⁾ <https://hollywoodlife.com/2017/07/18/descendants-2-costumes-mal-evilie-sequel-interview/>

³⁾ <https://www.washingtontimes.com/news/2012/oct/17/obama-starting-get-hang-debating-jabs-romney-binde/>

(4a) はインタビューの書き起こしであり、また、(4b) は直接引用部分で当該表記が登場している。このように、全てではないにせよ、[the ADJ this is] という表記は音声を書き起こした際に生じていると考えられるケースが非常に多い。

[the ADJ this is] という表記が実際のどの程度頻繁に見られるものなのか、あるいは ADJ 部分の実現値にどのようなものがあるか、という点に関しては、検索サイトを用いた純粋なウェブ検索では検証が難しい。ウェブ検索では品詞を指定したワイルドカード検索は行えないため、ADJ というスロットが指定できない上、前者に関しては検索のヒット数が一つの基準にはなるものの、同一内容のページが複数ヒットしていたり、ソースとしての信頼性に疑問の余地があるものも含まれてしまうためである。そこで、約 20 億語規模の巨大なウェブコーパスである *Corpus of Global Web-Based English* (以下 GloWbE: Davies, 2013-) を用いて実態調査を行った。また、補助的に、GloWbE と共に Brigham Young University の Mark Davies 氏が開発・運営するウェブコーパスである *iWeb: The 14 Billion Word Web Corpus* (以下 iWeb: Davies, 2018-) も使用した⁴⁾。品詞タグを用いて [the ADJ this is] を検索した結果の一部を表 1 に示す。総ヒット数は 148、異なりは 81 であった。この中には、

(5) None are braver than the other this is just my opinion though.⁵⁾

のように実際は当該表記の実現になっていないものも含まれているが、interesting (1) や amazing (5), strange (9), important (12), そして funny (14) が現れているものに関しては全て当該表記の実現例となっていた。また、iWeb で [the funny this is] および GloWbE で最頻出であった [the interesting this is] を検索したところ、それぞれ 20 例、18 例のヒットがあり、全て当該表記の実現例であった。

表 1: GloWbE (Davies, 2013-) 上の [the ADJ this is] における ADJ の実現値 [頻度 3 以上]

	ADJ	freq.		ADJ	freq.
1	interesting	11	8	outside	4
2	other	11	9	strange	3
3	special	6	10	sad	3
4	main	6	11	poor	3
5	amazing	5	12	important	3
6	above	5	13	left	3
7	original	4	14	funny	3

この検索結果をどうとらえるかは難しいところであるが、一定のバリエーションを持ち一定の頻度で生起している表記であることは確認できたと言えよう。従って、当該表記は、単なる一過性のミスではなく、何らかの規則性を持ったパターンであると結論付ける。

2.2 [the ADJ this is] の由来

先に述べたように、[the ADJ this is] は [the ADJ thing is] の誤表記であると考えられるが、その妥当性は (1) の音源における発音と、上に挙げた複数の実例を観察した上での意味上の類似性に依存しており、もう少し客観的な指標で確かめる必要性もあるように思える。そこで、GloWbE (Davies, 2013-) を用い、[the ADJ this is] の ADJ 部分の実現値として現れる形容詞が、[the ADJ thing is] の ADJ 部分の実現値としても高い頻度で現れていることを確認する。データを表 2 に示す。ボールドで示したものが両者に共通する形容詞であるが、[the ADJ this is] 側においてアスタリスクを付与したもの (other* など) は、実例がほぼ全て当該表記の実現になっていない形容詞であり、実質リストから除外して差し支えないと思われるものである。従って、アスタリスクのついていない形容詞に関しては、全て [the ADJ thing is] における ADJ の実現値として高頻度で出現していることが伺え、当該表記が [the ADJ thing is] の誤表記である可能性が強く示唆される。

2.3 thing の音韻縮約の可能性

本節の最後に、(3a) に提示した、[the ADJ thing is] における音韻縮約の可能性についての議論を提示する。結論から言えば、thing 部分の音韻縮約を示す客観的な証拠は得られていないのであるが、(1) における音源の音響的な解析を通して、その可能性を示すことを試みる。図 1 に、von Petzinger (2015) において、“the funny this is” という書き起こしがなされている部分を抽出した音源を解析したスペクトログラムを提示する。赤枠で囲った部分が“this”と表記

⁴⁾ iWeb は 140 億語規模であり GloWbE の数倍のサイズである上に、データ整備も入念に行われているため信頼も高いのであるが、本稿執筆時点では検索・閲覧用のウェブインターフェイスで品詞タグを用いた検索がうまく動作しなかったため、主用途での使用を断念した。

⁵⁾ <http://kirstie-2ndchanceatlife.blogspot.com/2012/10/did-you-know-i-never-used-to-want.html>

表 2: GloWbe (Davies, 2013-) 上の [the ADJ thing is] と [the ADJ this is] における ADJ の実現値 [上位のみ]

	the ADJ thing is	freq.	the ADJ this is	freq.
1	important	3010	interesting	11
2	whole	2288	other*	11
3	funny	1817	special*	6
4	sad	1396	main*	6
5	good	1355	amazing	6
6	main	1352	above*	5
7	best	1342	original*	4
8	other	1121	outside*	4
9	only	952	strange	3
10	interesting	676	sad	3
11	worst	572	poor*	3
12	great	541	important	3
13	key	442	left*	3
14	strange	384	funny	3
15	amazing	317		

されている部分に相当する。詳細な音響的な分析は未実施であるが、当該部分の各周波数帯 (特に F2-F4) が周囲と比較して弱化していることが確認できる。この事実がすなわち音韻縮約を意味するわけではないが、少なくとも音声的な弱化の可能性を見て取ることはできる。詳細は分析は今後の課題としたい。

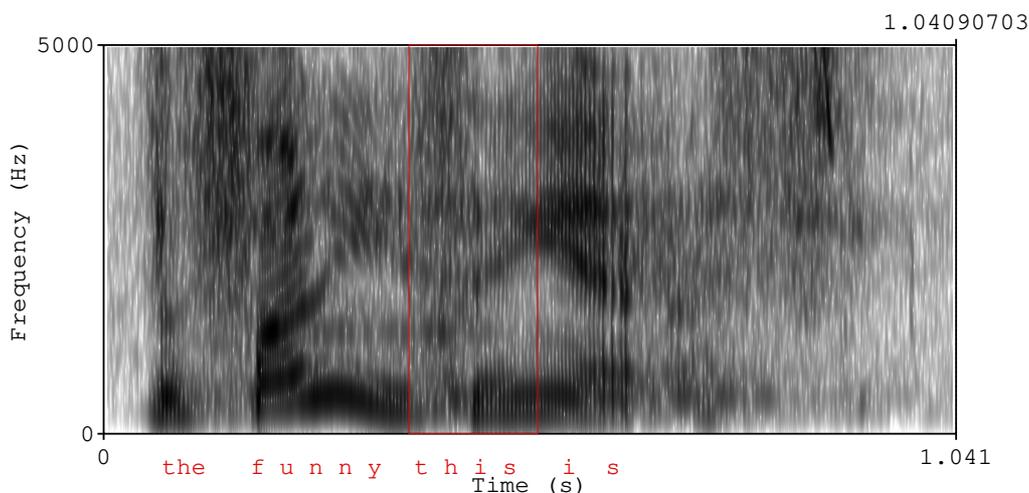


図 1: von Petzinger (2015) における “the funny this is” 部分のスペクトログラム (Praat [ver. 6.0.39] で作成)

3. 慣習とせめぎ合う文法の姿

ここで、[the ADJ this is] という表記が生じた要因を、創造的な言語使用を生み出す文法の働きと、定型的な言語使用を優先させる慣習との競合・拮抗に求める、ある種の文法観を提示する。具体的に言えば、(3b) に提示した通り、当該表記において this が選択されたのは、this is ... という極めて慣習性の高いフレーズの存在が故である、と考える。もちろんこれは、this 以外の表記が選択されうる可能性を全て排除するものではなく、this が選択される可能性が非常に高いことを示す程度であるが、目下のところ、これ以外に this が表記として選択された可能性が考えられないのも事実である。これが正しければ、(3c) に示したように、ヒトは、少なくとも耳から入ってきた音声がどのような言語表現の実現になっているかを判断する際には、文法的にあり得るかどうかということよりも、部分的であれ慣習的な定型表現の実現になっているかどうかを優先的に判断し、合致する (と思しき) 定型表現あればトップダウン

ンにその表現を認識対象として選択することがある、ということが帰結される。これこそが、慣習とせめぎ合う文法の姿である (3d)。

この考えは、「他の条件が等しければ全体的な解釈が優先される」という、いわゆる「イディオム原則」(the idiom principle: Sinclair, 1991) の議論と類似するが、大きな差異もある。Sinclair (1991) は、イディオム原則の対極に「自由選択原則」(the open choice principle) を挙げており、全体が優先されないような状況 (e.g., プライミング) においては、自由な語彙の選択が行われると考えている。しかしながら、[the ADJ this is] 表記が示唆するのは、“the funny thing is” という全体が (恐らくは音韻縮約によって) 認識されなかった際に移行するのは、自由な選択ではなく、this is ... という、「次に大きなサイズの全体」であり、規模が縮小しただけで、「全体優先」であることに変化はない、という可能性である。

また、類似の議論として、Wray (2007) の提示する、「必要な時だけ」解析 ('needs only' analysis) という文法モデルが挙げられる。Wray (2007) は、車の整備などを例に挙げ、通常の言語使用では表現の内部構造を気にすることなく、定型的に、表現全体を選択して使用しているが、何かトラブル (e.g., 相手にうまく意図が伝わらなかった) が生じた際には、ニーズに応じて表現を分析し、創造的に組み替える必要が生じる、と論じており、文法というのはそのような場合に活躍するもので、日常の言語使用にとってはそこまで大きな役割は果たしていないという、定型表現中心の言語観を提示している。[the ADJ this is] も、このようなモデルで記述・説明することが可能であると考えられるが、Wray (2007) は、定型的言語使用でうまくいかなかった場合は「分析モード」に移行する、という考えを提示しており、この点で Sinclair (1991) の議論と同様に、[the ADJ this is] 表記の実態を説明しきることができるとは言い難い。

本節の最後に、[the ADJ this is] が this is ... という「次に大きい全体」を選択した結果生じたものであることを示す一つの証左となるデータを提示する。ウェブ検索をしてみると、[the ADJ thing is] の誤表記とみられる、[the ADJ think is] という表記も存在していることが確認できる。thing と音声的に酷似した think が誤表記に現れるということは極めて自然であり、仮に文法的な破格性が生じるとしても、「音声的類似性に基づくエラー」として説明がつく。一方で、この事実は、[the ADJ this is] という表記の存在を改めて先鋭化するものでもある。即ち、[the ADJ this is] という表記は、純粋な音声的類似性に基づくエラーでは説明がつかず (そうであれば this ではなく think が選択されるだろう)、何らかの他のトップダウンな処理を想定しなければならない、ということである。さらに、iWeb (Davies, 2018-) で [the funny think is] を検索してみると、そのヒット数は 13 例であり、[the ADJ this is] のヒット数 20 を大きく下回る。これらの事実から、実際に起きているのは、think と this という単語単位での競合ではなく、this ... という、より大きな定型句単位での選択であるという可能性が強く示唆される。

4. 結語

以上、本稿では、講演 (von Petzinger, 2015) の書き起こしデータにみられた [the ADJ this is] という破格的な表記を分析することを通して、定型的な慣習性ベースの言語使用が、創造的な文法ベースの言語使用と拮抗する姿を描き出すことを試みた。

締めくくりに、類似の誤表記との比較を提示し、[the ADJ this is] を分析することの意義を再提示しておく。文法的には破格的であるが高頻度で観察される誤表記としては、would have などの [法助動詞+have] の連鎖を would of などと表記するパターンが挙げられる。しかしながら、would of 表記は、1) 弱化した have の発音が実質的に of と同一になること、2) 置換が起きているのが単語単位であると考えられることから、[the ADJ this is] とは同質のものとは考えられず、その意味でも [the ADJ this is] という表記の異質性が浮き彫りになろう。

参考文献

- Davies, M. (2013-). *Corpus of global web-based english: 1.9 billion words from speakers in 20 countries (glowbe)*. available online at <https://corpus.byu.edu/glowbe/>.
- Davies, M. (2018-). *The 14 billion word iweb corpus*. available online at <https://corpus.byu.edu/iweb/>.
- Sinclair, J. (1991). *Corpus, concordance, collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- von Petzinger, G. (2015). Why are these 32 symbols found in ancient caves all over Europe? Available online at <https://www.ted.com/talks/genevieve-von-petzinger-why-are-these-32-symbols-found-in-ancient-caves-all-over-europe>.
- Wray, A. (2007). 'Needs only' analysis in linguistic ontogeny and phylogeny. In C. Lyon, C. L. Nehaniv, & A. Cangelosi (Eds.), *Emergence of communication and language* (pp. 53–70). London: Springer.